

# 老いらくの随想

— 仏教福祉こそ —

## 一 精神福祉について

いわゆる社会福祉の増強発展は、むしろ目にあまるほどゆきとどいてまいりました。

国家予算の度ごとに、それ以前に国会議員選挙の大きな目玉的旗印として、大きく掲げられ、予算措置になると、福祉の後退とか、きりすてというかけ声で大きな問題となります。

そのことに全面賛成ということではなく、ほんとうに考えてみなければならぬことは、われとわが自身が自分の足まで喰いつくしては元も子もなくなるのではないかとい

うことです。

何もかも「あなたまかせ」になることが、ほんとうの社会福祉ではありますまい。どこかで一定の歯止めというか、制限がなければと思います。

そうなると、ほんとうの社会福祉とは、いったいどういうことなのか問い直してみなければなりません。やたらに制度だとか、機構とかをいくらいじってみても、恐らく完璧なものはありませんまい。

ここで考えたいことは、制度なり機構なりの中で、本人が満足しないかぎり、永遠に福祉の欠陥を訴えるということについてであります。

梶 原 重 道

( 起善寺住職  
全国保護司連盟副会長 )

このことはたとえば、貧しさとか乏しさに耐えよという意図は一毛もありません。

たとえば福祉は、惰民を養成するとか、面倒見のよい国家は国民を殺す、などとどうして呼ばれたり、指摘されたりするのでしょいか。

たまたまある新聞の論説にもでていましたように、福祉をあてこんだ離婚が増えているとか、手厚い福祉が家庭崩壊を助成しているとか、正直なところ私もこうした面に永年にわたって、一つのかかわりをもつものですが、確かにその傾向にあることは事実であります。

たとえ一部局であるとしても、こんな傾向がつづく限り、私も社会福祉の発展はもとより、その増強は永遠の不幸な夢であると考えます。

折角の世論を担って今日まで発展してきたわが国の社会福祉のために、まことに残念でなりません。

乏しいながら三十年にわたって、第一線の民間奉仕をして、この面に携わってきました私の実感として、世の進展に伴う社会福祉とともに、どうしてもここで考え直さねばならない問題は、同時に精神福祉の課題だと信じています。

いま自肅自戒などといえば、まことに陳腐であり、一笑されるか、あるいは逆行だとののしられる恐れさえあるかもしれません。

このことは、かつてメチルさえ飲んだ貧困に戻れとか、雨漏りのする屋根の下で辛抱せよということでは決してありません。

ただブランディーや、リキュールで酔うことのできる現在只今の間に、たとへローンにせよ大理石の玄関づきのわが住宅に住居しているうちに、ほんとうの社会福祉を、いま一度根本から問い直す必要があるという点であります。

すべての不満が悉く満たされねば、というような底なしの、極めて無責任な浅い夢から醒め、巨大な物量で有限を考え、深くものを考えることへの転換が、いま社会福祉に對する極めて大切で、しかも急を要する、そして根底的な福祉ではないだろうか、痛切に考えるのであります。

原始僧団が弟子たちの参加とともに、増強されるにつれ、戒律が制定せられていったことは周知の通りであります。いわゆる弟子たちの衆団生活とともに、随犯随制によって制定された律藏に一貫する釈尊制戒の基本は何であつた

でありますよう。

私はその一戒が制せられるごとに、必ず「少欲知足」と警戒せられ結ばれていることに、非常に関心をもつものがあります。

釈尊の集団生活の規範が、この少欲知足であつたとみて過言ではありません。

人間の欲求が、無限であるかぎり、しかも現代のようにすべての権利を省みず、ただ自己の権利のみに主点をおくかぎり、眞の福祉はありえません。

向上し発展しながら、その域を越え、自らがもしも憎民のために、社会福祉を提唱し、それへの実現を希望するとすれば、さらにはその福祉政策の悪用に自らを安んずるかぎり、如何なる社会福祉も永遠に完うしないでありますう。

発展する社会福祉とともに、私はそれに併行し、むしろその根底として、精神福祉の涵養こそが不可欠の急務であることを、あえて提言したのであります。

現代の一般社会福祉の傾向は、こうした変則的發展への充実に、駆りたてられているとみるのは、憶測でありますう。

うか。

あたかも民主主義は、責任と義務を果すことによって、実現されなければなりません。その実現がいかに今日の社会を混濁させたかは、論より現代社会が何よりの証拠でありますう。

こうした意味からしても、健全な社会福祉は、仏教福祉であることへの自覚がなければならぬまた自信を持つべきでありますう。

仏教福祉の徹底こそが、現代社会の要請に応えるものでありますう。

## 二 老いらくの幼少観

わたしたちの幼い頃、いたずらをしたり、とくにものを無駄使ひした場合には、よく「バチ（罰）があたると」と注意をされました。

そのことの意義が、どれだけわかつていたか、わたしもしかと覚えていません。

しかし何となくこわく、強いて云えば畏れということだ

ありましようか、ただ単に叱られたり、誠しめをうける以上に、何となく深いものを心の底に感じました。

習字などしていて、半紙の無駄使いでもしようものなら——もっとも当時は手習草紙といって、新聞紙の四つ切りを綴って、それに練習するのがならわしでありました——そんな紙の使い方をすれば「バチが当たる」ときびしくさとされました。

二・三字書きかけて氣にいらなければ、新しい半紙に書いて書き初めると、「このバチあたりめが」と叱られるので、その罰で字が下手になるような氣持さえわいたこと、いまでも覚えています。

食事のとき、ごはん粒をこぼして「目がつぶれるぞ」と、こぼすたびにくりかえされるので、何の疑いもなく、ただ素直にごはん粒を拾って口にいったものであります。

その理由など問題ではなく、ただ「目がつぶれる」ということへの畏れであつたのかも知れません。

そんなうそをつくと「鬼に舌をぬかれるぞ」とたしなめられたのと、同じ心境だつたのではないでしようか。

さすがにおかしなもので、お宮さまの境内や、お寺の土

塀などに小便をして「バチが当たるぞ」とたしなめられたりすると、心にとがめ神殿に向つたり、本堂の前では、ただ「すみません」という氣持で、人目をしのんで手を合わせたのも、「どうぞバチがあたりませんように」、このことももらしいねがいがあつたと思っています。

木の茂みの蔭や、人通りの少ない露路の土塀などの下には、手造りの小さな鳥居型の板や鳥居を朱で書いた板ぎれが、打ちつけられているのを見ると、そこをさけ方向をかえて小便をしたことなどを、いま改めて思いだすのであります。

バチをあてるのが、神さまや仏さまだという明確な意識があつたわけでもなく、またそのバチがどんなものであるのかもわからないままに、こどもらしく、ただ何とはなく不安で、得体のわからない、ただ何となく無氣味であつたことはたしかのようであります。

同じことをうっかりくり返して「あつ、バチが当たる」とわれとわが心を制する氣持は、ときにはあつたことをやはりおぼろげながら思いおこすのであります。

そう云えば、「水バチが当たる」ということばも思い

起します。

無雑作に水槽から、ザアザアと吸みだして顔を洗ったり、手の汚れを洗っているのを見つけられると、そんな無駄水を使うとバチがあたると、云われたものでした。

今から考えてみて、そうした折、今日感じるような、ケチッていとか、しみったれというような気持のわかかったのは、どうしてであろうかと、不思議におもうのであります。

あるいはそんなことを忘れてしまって、記憶がないのかもしれないませんが、いわゆる「バチあたり」と叱られることによって「大事に使え」とか、「そんな勿体ないことをするのではない」ということの方が、心の底に強く残っているということとは、いったいどうしてでありましょう。

この頃のような使わずの社会生活になじみながら、ついその頃のことを時折にせよ、思いだされるということを、理屈ぬきで私は考えてみたいのであります。

わたしの小僧時代、銅（赤金）の洗面器を井戸端にもちだして、ツルベで井戸水を汲み顔や手を洗ったものでした。

その洗い終った水を、そのまま井戸端の溝に無雑作に捨て

ているのを見た師僧は、そのままするのではない、井戸屋形の横に生えている葉蘭の根にそいでやりなさい、とか、道路にまきなさいと、いつも注意をうけたものであります。

使いふるした水は、それなりに有効に二度使う、風呂の湯水は翌朝の拭き掃除に使ったり、内庭の散水用に役立てるなどが習わしでありました。

井戸水は、湧いてくれなければ、どうすることもできません。

川の水は、流れてきてくれなければ、くむこともできません。

水は人の力でつくりだせるものではない。

水バチがあたるといふ心の中には、だからバチのあたるといふ、使い方は許されなかったのでありましょう。

水道の蛇口をひねってみて、水がでなかったらどうしようというようなことなど、考えてみるのがむしろおかしい時代になれてしまつて、それがあたりまえになつてしましました。

バチのあたるといふことをすると、お互友だち仲間で、

「おい叱られるぞ」とお互いにたしなめあうことのできたその頃を、いまでも強烈に思いだすのであります。

とくに、学校の先生の訓しを守らなかったときなど、友だちの誰かが、「叱られるぞ」と制しあったものでした。教室における先生のしぐさはもちろん、その歩き方や、手のふり方まで、その頃のわたしたちは先生の影響をうけたものでした。

それほど先生には絶対であり、むしろ別人のような敬いと、尊とさというものを、心の底まで持ちつづけていました。

先生の云うことはよくききなさい、というのがわたしたちの入学事前の、親たちからの至上命令でありました。

やがて入学でもしようなものなら、親からのこの躰けは、終始一貫した必須条件として育てられてきました。

その頃のわたしたちは、木綿の着物で通学しました。今のように制服があるわけではなく、また半袖のシャツというものもなく、ただ男子には制帽だけがありました。

その帽子をぬいで、先生にあいさつする時ほど、得意然と感じる時はなく、まことに懐かしい思い出の一つであ

ります。

入学式をはじめ卒業式・元旦や紀元節といった祝祭日には、男子は立て縞の木綿の袴をつけて登校しました。そのとき緊張した気持は、いまもよみがえるおもいであります。教頭先生の「最敬礼」という号令で、モーニング姿で白い手袋をはいた校長先生が、教育勅語を奉読される間、直立不動で頭をふかぶかとさげたままでした。

その間咳ばらいや、鼻をすすってはいけないことを、常に躰けられていました。それでも勅語の奉読が終ると、次から次に鼻をすすする音が、静肅な式場にひろがったものです。

式場の厳肅のために、それに耐えられる子は、いわゆる行儀のよい子として、担任の先生からほめられたものであります。

いまの先生や、生徒たちには、とうてい想像してもらえない、むしろナンセンスでさえあるかもしれません。

その頃は講堂はあるわけではなく、教室と教室との間仕切りの戸をはずし、すべて机や椅子を片づけて式場にするのですから、その準備だけでも上級生や先生たちは大変で

した。

その式場では、私語はご法度で、起立したまま、ささやかず、からだを動かすことや、頭を前後に動かすことなど許されませんでした。

この辛抱に耐えぬいた子が、いわゆる行儀のよい子として、平常の行儀とともに評価せられて、勉強の成績とは別に、品行方正を賞する賞状がありました。

隣りの友人とは絶対に話し合わず、からだをできるだけ動かさず姿勢のよい子としての、行儀が会同するとき最も厳しく躰けられていました。

この頃のようにいろいろな研修会や、会議のたくさんある時代になって、そうした席で、ざわめきや、私語がわたしには人一倍に耳ざわりになるということは、あるいは小学生時代のこのような躰けが、身心の中にとけこんでいるからではないでしょうか。

少なくとも、決してそれと無縁ではないと信じています。何といっても、家庭で一番こわくて、えらい人は父でありました。

これはわたしの家だけではなく、その頃はどこの家庭で

も父の座というものは、厳として確立していました。

はいい話が「そんなことしたら、お父さんに叱られる」とか、「お父さんに云いつける」というのが、どの家でも母のならわしでありました。

そして母たちの心の底には、「お父さんが働いてくれるから、学校にもやってもらえるのよ」という信条があったと思います。

叱られてこわいのが父であると同時に、ほめられてうれしかったのも父の存在でした。「それごらん、お父さんがあんなに喜んでくれている」と、まず助言するのが、どこの家でも母の役目だったと思います。

成績がよくても、わるくても、またよいことをしても、わるいことをしても、すべて、ともかく「お父さんに」といつづけた母のことばが、いまでも懐かしくまた美しいものだったと思っています。

どことなく厳しく何となくこわさがあり、いつでもどこかで見つめているような力を感じながら、それでいてせせつかず、にこやかに大きく抱いてくれているようなものを、どこの家の父からも感じたものであります。

今から考えてみると、そんな父の座を根太く築きあげていたものが、その頃の母であつたと思うのです。

決してわたしの家庭だけのものではありませんでした。友だちのどこの家にも出入りしても同じものを感じたのであります。

いま、何をしてそんな目にあつたのかは覚えていませんが、素っ裸にされて、泣きわめきながら「かんにんして、かんにんして」と叫んでいるのを、隣りのおばさんが、そんなわたしを抱きかかえるようにして連れ去って、その場をとりつくろってくれたことを、懐かしく思い出します。

こんな厳しい父ではありませんが、暇をみては肩ぐるまにのせて、近くの弁天さんまで往復してくれました。

日を追って、やがて肩の上に直立させられ、足許を父が片手で持ったまま、まるでサーカスのような気分で、得意になったことを思い出します。

まるでその頃の幼い心になったようであり、そのときの満足そうな若かった父の顔が思い浮かびます。

こわい人のついでに、わたしたちの幼い頃は、隣り近所のおじさんたちがいました。

狭い道や、露路などで、かくれんぼをしたり、木切れや竹の棒をふりかざして追いかけあいをしていると、「危い、気をつけろ」とか、時たま小石でも投げあっていると、たちどころに握っていた小石を棄てさせられたものであります。

やさしい近所のおじさんでしたが、こんな時にはとてもこわったものです。時たま道で出逢つて素通りでもしようものなら「こら、お早ようはどうした？」と叱られてからというものは、友だちとみんな、そのおじさんにあえば、あいさつをするようになりました。

こんなおじさんは、その人一人だけではなく、どんなおじさんでも、よしあしにつけいろいろ注意をしてくれたものであります。

仕事の帰り途など、新聞紙でつくった紙袋（カンブクロ）から、買ったてのぬくぬくの回転焼を、一つづつくれて「もうおそいから早う家に帰りなさい」といつてくれたのも、そんな近所のこわいおじさんでありました。

時には、わんぱくの仲間入りなどして、一緒に遊んでくれたものでした。



その頃のわたしたちは、みんな藁ぞうりをはいてとび廻っていました。時たまその鼻緒が切れてこまっていると、そんなおじさんが応急の修理をしてくれて、家へ帰れたことなど、とてもうれしかった思い出として心に残っています。つまりわたしたちの少年期には、こんなおじさんたちの、こわい目や、やさしい目が、きつとどこかで光り、見守っていてくれたのであります。

どんなことをしても叱られず、またどれほどすれちがっても、ことば一つかけてくれるようなおじさんのいなくなつてしまったこの頃のこどもたちが、自分たちのおもいのままのことができるとしても、はたしてほんとうの幸せなのだろうか。

少なくともわれわれの年令になったとき、いまのこどもたちにどのような思い出が残るだろうかと、淡い淋しさを思うのであります。

あるときはよろこんで笑い、ある日は悲しみ泣き、ある折は腹立ちけんかをして生きねばならない人間として、わたしたちの少年時代にはその周辺にたくさんのおじさんがいてくれたことを、今日のような時代だから、懐かし

く思い起すのでありましょうか。

ましてわが父、わが母、そして兄妹や多くの友だちなど、誰一人としてわたしの今日に無縁なものは一人もいなかったことが、これほどありがたく、なつかしく、幸せであつたと思えることが、この老齢だからでありましょうか。

あるときは、こわく畏れという気持がわかり、そして少くともバチのあたらないことに気を配り、つつしみとか、勿体なさとか、いくらかでも味わう日のあることが、人間として生きること、どれほど大きくかわっていることを、わたしながらに感謝できることが、これも年輪を重ねてきた老齢のせいでありましょうか。

すべてはうたかたの夢のような片鱗だとしても、それがよみがえるということの事実、わたしは一つの意義を感じるからであります。

先端技術の際限のない発展と、情報化の日進月歩どころか、分進秒歩的な躍進の中で、いかに教育の制度が改正されるとしても、人間がほんとうに生きるということについて、わたしには大きな不安が残るのであります。

相変らずの環境汚染と、欲望刺戟社会の中で、少年非行

や犯罪の激増ぶりを思うと、すべてに乏しく、貧しかったわたしたちの少年頃はむしろ幸せでありました。

あれこれと態よくかたづけてはいても、体当たりというのか、人間というものの根源に立って、わたしたちのこのようない出が、いわば老いらくの郷愁として一笑されるほど、無意義なものでありましようか。

### 三 仏教福祉の出番

成人の基礎である幼少期の育成が、現代社会の少年非行や犯罪に、不可欠の条件をもつものであるかは、その原因や動機として既に明確であります。

低年齢層に波及する幾多の多様にして、かつ複雑な事件や、そのものの考え方の過程において、どれほどの影響をもたらせているかという点に、わたしは現代の少年諸君に同情し、かつ不憫さを感じるのであります。

このことは単に非行や、犯罪のかかわりだけではなく、社会福祉への歪みに重大な影響のあることを考えざるを得ません。

名刀をあまりにも大上段にふりあげすぎた現代の社会福祉だからこそ、いたずらなから振りの状態が一般に現代社会福祉だとの感がするのであります。

どうしてもその根源を、仏教福祉に求めなければならぬと信じます。

前述の、老いらくのわたしの幼少観は、単なる懐古主義ではなく、そうした生活の実態の中に、自ら仏教福祉の実践があったと感じるのであります。

自利に偏した現代社会福祉観から、利他の社会福祉への転換が必要であり、独占の社会福祉からわちあう社会福祉への精神のひろがりを考えなければならなくなりました。

願共諸衆生、平等利益の仏教生活の実践として、現代こそ仏教福祉の躍進が望まれなければなりません。

社会福祉の受け皿としての精神涵養の基盤とともに、仏教福祉こそが次代への花型でありますまいか。

他人への奉仕を要請し、それに頼る現代社会福祉から、奉謝の心とともに進む仏教福祉の真髄こそ、仏教者としての福祉対策でないかぎり、願共諸衆生、平等利益の成仏国土の実現はありえないであります。

まさしく仏教福祉の出番であります。

心のもった受け皿のなくなった今日の社会福祉政策は、畢竟われとわが足を喰いつづけねばならないと思うからであります。